

SDGsについて学ぶ

浄土真宗本願寺派総合研究所

上級研究員

おかざき ひでまる
岡崎 秀磨

私には子どもが二人います。小学校三年の長男と幼稚園に入園したての次男です。大きくなるにつれ、彼らなりにいろいろな問題に直面しているようです。「苦手だなと思う友達とどう付き合えばいいのか」「友達と比べて自分にはできないことがあるのが悔しい」「友達と遊ぶゲームが欲しいけど、なかなか親は買ってくれない」。子どもと接しながら、その都度どのように対応すればいいのか妻も私も悩んでいます。

親の対応が間違っていたと反省することもあります。常にかかっていることは、

子どもを取り巻く環境の悪化、人口減少や過疎化にともなう日本社会の先行き、などさまざまな報道されています。

「この子どもたちが大きくなった時に、今の社会はどうなっているんだろう?」

漠然とした不安が頭をよぎることがあります。不安が徒労に終わればいいのですが、二〇一五年九月の国連総会では、国際連合加盟国の国々が一致して次のような答えを出しました。

「今の私たちの暮らしを変えないままでは、世界は、地球は大変なことになる。

今の子どもたち、そして、これから生まれてくる子どもたちのために、私たちの行動を変えていかなければならない」

私たちは現代社会において便利で、快適な生活を享受しています。しかし、その生活の見えていない部分、あるいは、普段見ていない部分には多

「大きくなるにつれ、深く傷つき悩むことに直面したとしても、自分らしく対応しながら、前に進んでいって欲しい」

ということですが、子どもが青年になったとき、大人になったとき、あるいは家族をもったとき、まだまだ先のことだと思いつつも、私も妻も子どもと一緒に成長しているように思います。

ところで、「子どもが大きくなったとき」を思い描くと、少し不安になることもあります。テレビニュースなどでは、世界で頻発する異常気象などの環境問題や、日本社会で長引く不況、

多くの問題を抱えています。例えば、私たちの暮らしの多くは自然の資源を消費することで成り立っています。将来にわたって資源が枯渇しないと断言できません。また、日本では飲料水も食品も十分にありますが、世界では、また日本国内でもその日の食べ物ですら十分でない方々がいらっしゃると思います。

問題を解決せず放置し続けていたら、私たちの暮らす社会、そして地球は存続できなくなる。こうした危機感を背景として、二〇三〇年を達成目標年と定め、「貧困」「飢餓」「不平等」「環境」など合計十七の目標を掲げた、「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)」（英語の頭文字をとって「SDGs (エスディー・ジーズ)」と略称されている)が設定されました。

SDGsは、「誰一人取り残さない(誰一人置き去りにしない)」を理念としています。将来世代の

ことを考えるあらゆる人びとを対象とした「みんなのための」「みんなで支える」目標です。そのため、誰か特定の人だけが、私だけが、私が住む地域だけが、といった考え方から脱して、社会の片隅で、あるいは、私たちのすぐそばで苦しんでいる人、悲しんでいる人がいれば、その人を「取り残さない」「置き去りにしない」ことの大切さが強調されています。

このように言われると、「自分では何もできない」「世界のために、なんて考えられない」と思ってしまうかもしれません。確かに、SDGsは私たち一人ひとりの行動の「変革」を求めています。しかし、それは「しなくてはならない」という形での命令ではありません。子どもたちの将来や、子どもたちが暮らす地球の将来を考える一人ひとりが、できる範囲でできることを始めることが大事であると考えています。そして、もし同じ

として意見を言い合い、相談し合っています。また、私も職場のお父さん同士で家庭や育児の悩みを吐露することがあります。そうした時、誰もが子どもの笑顔、あの周りの人たちを幸せにするような「くったくのない笑顔」が大好きで、その笑顔がいつまでも続けば、と思っていることに気がきます。

「くったくのない笑顔」のために、また、子どもが大人になり子ども（孫）ができたときにも「くったくのない笑顔」でいられるように、私たちは悩みや悲しみ、そして喜びを人びとと共有しながら、できることから始める必要があるのではないかと、私は、このことをSDGsから学びました。

目標を持つ方や、同じ考えの方がいるならば、そうした人びとが「つながり」をつくりながら行動していくことを勧めています。

SDGsでは、世界中の一人ひとりを対象に「誰一人取り残さない」ために、人びとが「つながり」ながら少しずつ行動していくことを勧められています。この理念や活動方針は、このたび改定されました。仏教婦人会綱領に示された「自他ともに心豊かに生きることでできる社会をめざしともに歩みを進めます」、そして「いのちの多様性」を認めていくこと、と変わるものではないと理解することができます。つまり、SDGsは「仏教婦人会」の活動そのものが「世界的」な活動でもあることを教えてくれているのです。

子どもたちの将来のために、私と妻は悩みながらも日々過ごしています。妻は、小学校や幼稚園での「つながり」、同じ年頃の子どもを持つ母親

